

[論文]

幼児の音楽的な表現を引き出す試み

—絵本のオノマトペを使って—

横井志保

名古屋学院大学スポーツ健康学部

要 旨

幼児の音楽的な表現を支える活動として、日常の保育の中で行われている読み聞かせがある。絵本の中には声に出して読むだけでリズムカルで音楽的な作品も数多くある。それら絵本にみられる言葉のリズム（オノマトペ）を吸収し、自分なりのオノマトペをつくりだすのか。また、そのオノマトペを使いながら太鼓類をたたいて表現するのか5歳児を対象に実験的な実践を行った。その結果、就学を控えた5歳児らはオノマトペ自体は楽しむものの、答えの決まっていないオノマトペの創作には躊躇する姿がみられた。幼児の音楽的な表現を引き出すには、日ごろのシンプルな体験の積み重ねが新しいものを生み出すためには必要であることが示唆された。

キーワード：音楽的な表現，絵本，オノマトペ，たたく表現活動，実験的な実践

An attempt to bring out musical expression in young children:

Using onomatopoeia from picture books

Shiho YOKOI

Faculty of Health and Sports
Nagoya Gakuin University

1. 問題の所在

幼稚園教育要領の領域「表現」のねらいの3番目には「生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。」と、ある¹⁾。幼児たちが表現を楽しむためには、保育者が日常の保育の中で幼児たちへの刺激となる環境をつくりだしたり、友達と一緒にイメージを共有し合って遊ぶことができるように、その仲立ちをすることで幼児の表現しようとする意欲が育てられよう。ただ、特に音楽的な表現遊びは自然発生的に起こる他の遊びと違い、遊ぶための楽器類を音の環境として準備するだけでは成立しにくく、保育者の一定の指導が必要となる。また、音楽的な表現活動は、生活発表会等の行事の出し物として保護者に披露することも多く、日常の保育活動に留まらない見せるための活動となることから、活動に苦手意識を持っている保育者が多くいることが筆者のこれまでの研究で明らかとなっている²⁾。

このような背景を踏まえると、保育者が幼児の音楽的な表現を支える活動として、どのようなことが考えられるのか。保育における音楽的な表現活動は、歌ったり楽器を奏したり、直接音楽に関わることだけではない。日常の保育の中で行われている読み聞かせにも言葉のリズムが感じられたり、言葉自体が音となって蓄積されることで音楽的な表現の素となり、表現時の一助となり得る。

これまでに、絵本の読み聞かせを通して日本語のリズムから拍を感じる遊びの実践や小学生を対象としたオノマトペを用いたリズム創作の実践研究は蓄積があるが、幼児を対象としたオノマトペを使った器楽の表現活動はまだ無い^{3) 4)}。

そこで本研究では、絵本にみられる言葉のリズム（オノマトペ）を、幼児がいかに自分の中に取り込み、自分なりのオノマトペをつくり太鼓類をたたいて表現するのか。実験的な実践を通して見られた事象について検討し明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

愛知県内の公立S保育園において、2024年12月6日から毎週1回計3回、年長児26名を対象に筆者が実践を行った。実践には担任保育士の他、園長が一緒に加わった。1回目の実践はおよそ30分程度行った。2回目は2グループに分けて20分ずつ行い、3回目は3グループに分けておよそ10分ずつ行った。

実践の経過をビデオカメラ2台を使用し、1台は据え置き、1台は手持ちで撮影した。他にデジタルカメラでも動画と静止画を撮影し、補助資料として幼児の発話や表現の仕方を分析した。

分析結果については、実践に幼児と共に参加してくれた担任保育士らの意見を参考に恣意的な分析を出来る限り回避した。

実践の内容は表1にまとめた。

表1 実践日とその内容

月 日	内 容
12月6日	<p>「カホンとの出会い」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常聞こえる音や、カホンを見てどんな音がするのか言葉で言ってみる ・『ぼくのいちにちどんなおと?』を見る ・カホンの音を聞いて、どんな音がしたのか言葉（オノマトペ）で表現する
13日	<p>「オノマトペを考える」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『もけらもけら』『ぼくのいちにちどんなおと?』の絵を見て、オノマトペで表現してみる
20日	<p>「オノマトペをたたく」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『たいこ』と一緒に声を出して読む ・カホンを中心にオノマトペを言いながらたたく（他にトロムスも使用）

《実践で使用した絵本について》

絵本は幼児たちがオノマトペを楽しむことができ、更には実際の演奏場面や音楽をイメージできるような音楽的な場面が描かれていたり、オノマトペが音楽する際のモデルとなるようなものを3冊選出した。

①『ぼくのいちにちどんなおと?』⁹⁾：主人公の‘こうちゃん’の起床から就寝までの生活が、様々な登場人物と共にオノマトペを用いて展開されており、文字は大小様々で、書かれている場所も絵に合わせて一定ではない。また、絵のみでなく、音を可視化するような立体的な陶器の造形物の写真が配置されて表現されている。

②『もけらもけら』⁹⁾：オノマトペのみが絵と共に書かれているが、『ぼくのいちにちどんなおと?』同様に文字は大小様々に書かれており、絵に合わせた場所に書かれている。

上記①②の2作品はジャズピアニストである山下洋輔による作品であり、文字の大きさや書かれている文字の間隔に合わせて読むだけでも、言葉のリズムやその言葉自体が音楽的な、ジャズ音楽の様に聞こえる。

③『たいこ』⁷⁾：誰かが太鼓をたたいていると、そこに動物たちが次々とページをめくる度に「なかにいれて」とやってきて、最後は「うるさいぞ!」と言ったワニまでが仲間になって、みんなで太鼓をたたいて楽しむというストーリーであり、動物それぞれが決まった独自のオノマトペ（リズムパターン）で最後までたたき続ける。

《くちしょうが口唱歌とオノマトペについて》

日本にはくちしょうが口唱歌という、楽器の旋律またはリズムを口で唱える日本伝統音楽の演奏に用いる表現方法がある⁸⁾。主に練習の時に楽譜を用いず、口唱歌を使用した口承によって師匠から弟子へとその技は継がれていく。和太鼓を例に挙げれば「ドンドコドーンコドンカッカ」は初めのドンで右手で強く打った後、次のドコで両手を交互に軽く打つ。次のドーンコは右手で強く打った後、3連符（西洋音楽の様に正確に刻んだ3連符ではない）の3つ目の音符の辺りのタイミングで左手で軽く打つ。ま

た、次のドンで右手で強く打ち、カッカは太鼓の革の側面を軽く打つ、と言った具合である。また、日本語のオノマトベも同様にその多くが擬態語であり、様子や動作を表す時に使われている。ただ、日本語の場合には擬音語、擬情後も含んでいる。さらに、オノマトベは「新たに作り出せる語」としてオランダの言語学者マーク・ディンゲマンセによって定義されている⁹⁾。

3. 倫理的配慮

研究に協力してもらった幼児の保護者および保育士には、研究の趣旨と方法、個人情報とプライバシーの保護、研究協力への自由意思と協力の撤回の事由について文書で説明し、本研究への同意を書面にて得た。

4. 結果と考察

(1) 文字の配置から聞こえてくるリズムカルなオノマトベ

実践で使用した絵本には文字の大きさや配置の仕方から、一定のリズムが感じられた。『ぼくのいちにちどんなおと?』⁶⁾の冒頭の歯磨きシーンでは、「しゃかしゃかしゃこ / しゃかしゃかしゃこ / ぐちゅらん がらげろ ぺ」*¹と、スペースで区切った部分を1拍で読み、斜線で区切ると3拍子で読めるが、最後は「ぐちゅらん がらげろ ぺ」と、やはり3拍子として読めるがリズムが崩されている。『もけらもけら』⁷⁾も、「しゃばた / しゃばた / しゃばた / ぱたさ」*²と、同じ言葉が繰り返された後、「ぱたさ」と、言葉のリズムが崩されている。このリズム崩しの手法を、古市は「リズムに飽きてきたこどもの集中力を再び覚醒させる」⁸⁾と言う。これら2作品には他にもこのような表現が多数みられた。

『たいこ』⁹⁾にも同様の手法はみられる。「うるさいぞ」と言ったワニが「トン ポコ ペタ ボン」の音でつくられた、それまでの4拍まとまりのいくつかのリズムを一旦は崩すが、仲間に入ることによって再び「トン ポコ ペタ ボン ガオー ゴン」と、リズムカルになり、次は4拍(×2)のまとまりのリズムに戻ることができる。山下の作品同様に文字の大きさが変えられており、文字の大きさや太さ(濃さ)で、アクセントを付けたり強弱を付けてリズムカルに読み進めることができる。筆者が拍にのって実際にたたいているように動物を指さすと、幼児たちはそれぞれの動物のリズム(オノマトベ)を、太鼓をたたいているかのように言い、一緒に絵本をリズムカルに読み進めていた。

(2) 絵本から聞こえる多数の音(オノマトベ)

前述のリズム同様に、絵本を読み進めると書かれているオノマトベが実際の音のように聞こえてくる。声色を使わず、地声で読み進めてもオノマトベはそれぞれが表情を持っており、それらしく聞こえるのだ。

『ぼくのいちにちどんなおと?』¹⁰⁾は幼稚園に通う‘こちゃん’の1日がオノマトベで表現されて

*1. 2 「 」内は筆者が絵本の文字の大きさを模して記したものであり、斜線は筆者が加筆した。

いる。幼児にとっては、身近な行為や出来事がオノマトペで表現されており、その初めて聴く音を面白がって声に出して真似しながら聴く幼児もいた。

『たいこ』¹¹⁾は登場人物(動物)毎にたたく音(オノマトペ)が決められていることで、幼児たちは直ぐにその登場人物と音(オノマトペ)を覚えてしまった。そして、普段から保育士と音楽する時に使用するのと同じ様な短い音でできた馴染みのあるオノマトペの繰り返しで構成されていることで、一緒に声に出しながら読み進めることができた。筆者が登場人物を拍にのって黙って指さすと、幼児たちはまるで自分がたたいているかのように絵本に出てきたそのままのオノマトペを大きな声で発していた。また、それによって太鼓をたたくイメージが共有された。そして、後からおこなった自分で考えたオノマトペを言いながらたたく活動では、多くの幼児たちにカホンの音を表現するオノマトペとして使用されていた。

『もけらもけら』¹²⁾も同様に絵本の絵を見ながらオノマトペをつくってみよう促したが、絵本に書かれている文字を音読するかのようにならで揃って絵本の文字を読み始めたので、文字を隠すと誰も声を出さなくなった。

幼児にとって、「聞こえる音⇒面白い⇒口に出す」というこの一連の流れは、聞こえたオノマトペを面白く感じてそのまま真似して口に出すという、日常的によく見られる普通のことである。しかし、2週間にわたり保育室で自由に絵本を読むことができ、ページの場面ごとにどんなオノマトペが書かれていたか、自分で読んで知っていても口に出して繰り返し言うような事はなかった。聞こえた、面白く感じた音をそのまま真似ることと、面白く感じた音を絵に合った音を考えて声に出すことは全く別の行為であり、また容易ではないことが示唆された。

(3) 安心感が表現の活動の誘引となる

古市はリズム教育においては、「楽しい」「心地よい」感覚が核となり、繰り返しの楽しさを十分に味わうことが基本となり、「リズム反応ができる」ということは、音刺激への「同期」と「予期」ができることである¹³⁾という。山下の2作品は、幼児たちがこれまでに聞いたことのない言葉の面白さがあり、刺激となるものの、再現することの難しさがある。また、山下自身がジャズピアニストということで、作者自身にジャズのリズムが備わっており、それが絵本のオノマトペとして表現されている。5歳児には初めて出合うリズムと音(オノマトペ)ばかりであった。そういう意味では、『たいこ』¹⁴⁾には、決まったテンポで読み進めることができ、音(オノマトペ)がページをめくる度に増えるリズムパタンの繰り返しがある。幼児にとってはわかりやすく安定感があり真似しやすい。そして、日ごろから聴き慣れた、口唱歌的なたたく音のオノマトペはリズムが崩れても自分で再構築することが可能であった。

(4) 創作されなかったオノマトペ

1回目の実践ではカホンを見て、どのような音が出るのか想像して答えてもらった。すると、木製の見た目からか表2に示したような、乾いた、硬いモノをイメージしたようなオノマトペを答えてくれた。また、カホンの音を実際に聴いた後に幼児たちが聞こえた音として答えてくれたオノマトペは

表2 カホンの音を想像して

	答えられたオノマトペ
カホンの見た目からイメージ	ボンボン, ボーン, ドンドンドン, コーンカッカ, ポン, コン, トン, コンカンコンカン, ドン

表3 カホンの音を聴いて

	答えられたオノマトペ
カホンの音を聴いた後	ドン, トントン, コンコンコン
1週間自由にカホンで遊んだ後	ドン, ドンカッカッカ, バン, ポン, トン, ザラザラ (上部)
絵本『たいこ』を見た後たたきながら	トントン, トンボン, ダンゴン, トンボンボンボン

表3の通りであった。

2回目の実践では、『ぼくのいちにちどんなおと?』¹⁵⁾と『もけらもけら』¹⁶⁾を読んだ後、絵本の絵だけを見せながら幼児たちに好きに言葉をつけてもらった。就学直前の5歳児にとって、与えられた課題に向かって取り組むことは楽しく、また容易い。しかし、それは「できる」「できない」「正しい」「正しくない」と、誰から見ても結果が明らかな場合であり、本実践のように、自分の感性においてオノマトペを考えるという課題には正解が無い。実際には幼児の感覚によって考え出されたオノマトペは全て正解と言えるが、答えが決まっていない本活動は幼児にとって不安であり、これまで一緒に読んだ2冊の絵本から受けた言葉の面白さやリズムの楽しさを他者からの評価を気にして再現してみようという気持ちにはなれないのだ。就学を控えた多くの幼児は、正しいことをしなくてはいけないという気持ちが強く働き、新しいオノマトペを考え出すに至らなかった。

総括と課題

本研究の実践では幼児にとって刺激となる、面白くりズミカルな音楽的な絵本のオノマトペに着目し、3冊の絵本を抽出した。それらのオノマトペを聞くことで、その後の幼児の音楽的な表現がどのように引き出されるのか、幼児ならではのユニークなオノマトペをつくりだすのではないかと、カホン等をたたく表現活動の結果から検討を試みた。

絵本の絵を見てオノマトペを考えてもらおうとした時に、文字を隠すと一斉に黙ってしまった幼児たちの様子から、年長児になると、正解を求めるようになり、自分がやっていることが正しいのかどうかを気にするようになる、と、園長が話されていた。自分が感じたことをそのままオノマトペとして言葉にする本実践に正解は無い。しかし、年長児にとって答えの無い(答えが決まっていない)活動は不安であり、仲間や保育者と共におこなう活動が興味深く面白いものであっても、言葉のリズムを新たに考え、表現しようとはしなかった。

幼児の音楽的な表現を引き出す試み

幼児の音楽的な表現を引き出すには、日ごろのシンプルな体験の積み重ねが新しいものを生み出すために必要であることが示唆された。

本研究は対象を5歳児のみとしたが4歳児以下の幼児たちの表現の検討が課題として残された。

謝辞

活動に楽しく参加してくれた保育園のおともだちと、実践に協力して下さった園長先生と担任の先生に感謝いたします。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省『幼稚園教育要領』2018
- 2) 横井志保「保育者は音楽的な表現の保育をどう捉えているか—保育士の語りの分析から—」名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇 第58号(1), pp. 11-21, 2021
- 3) 佐野仁美, 岡林典子, 坂井康子「絵本を用いた拍を感じる表現遊び—創造性と共同性に着目して—」京都橋大学教職保育職支援センター紀要 第1号, pp. 73-89, 2025
- 4) 佐野仁美, 岡林典子「オノマトペを用いたリズム創作の可能性—協働性に着目して—」京都橋大学研究紀要 第45号, pp. 83-95, 2019
- 5) 山下洋輔『ぼくのいちにちどんなおと?』福音館書店, 2016
- 6) 山下洋輔『もけらもけら』福音館書店, 1990
- 7) 樋勝朋巳『たいこ』福音館書店, 2019
- 8) 浅香淳編『新訂標準音楽辞典』音楽之友社, 1991
- 9) 今井むつみ, 秋田喜美『言語の本質』中央公論新社, 2025
- 10) 前掲5)
- 11) 前掲7)
- 12) 前掲6)
- 13) 古市久子「絵本がもつリズム性が子どもに与える教育的意味」東邦学誌 第41号(1), pp. 109-125, 2012
- 14) 前掲7)
- 15) 前掲5)
- 16) 前掲6)

付記

本論文は日本保育学会第78回大会において発表した内容に加筆、修正したものである。